

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』

第6号 (2006年11月)

ハーバード大学

ケネディ・スクール

シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. 短い秋を惜しむハーバードより
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 日中関係: 21世紀東亜最大の課題
米中関係@Harvard
グローバル時代の日中関係
日本の国益を考える
4. 編集後記

1. 短い秋を惜しむハーバードより

10月に入ると秋も深まり、ニューイングランドの美しい紅葉の季節も駆け足のように過ぎて行きます。「グローバル時代における知的武者修行」を目指す若い方々を対象としたニューズレター第6号をお届けします。

皆様は秋の味覚を日本で楽しまれていることでしょう。中国人と秋の味覚の話をすれば一番に浮かんでくるのが上海蟹(大闸蟹)です。3ヵ月程前の8月4日、「アレ? もう旬だったっけ?」と驚きつつ新華社通信の或る記事(ウェブ版)に目を奪われました—「独『ハンブルグ・アーベントブラット』紙: 中国の上海蟹欧州で事故(汉堡晚报: 中国大闸蟹欧洲‘闯祸’)」という表題の記事です。エルベ川流域で上海蟹が大繁殖し、生態系においても「中国脅威論(中国威胁论)」が高まっていることをハンブルグの新聞が伝えているとのことでした。ドイツをはじめ欧州諸国は今後断乎たる対抗処置を採ることや、2003年からは欧州産上海蟹が中国へ出荷されていることを伝えていました。私はこの記事を読んで、中国の「ヒト」、「モノ」、「カネ」そして「情報」、更には「カニ」までが世界中を巡っていると知

り、中国のグローバル的な展開に改めて驚嘆しております。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

10月中旬、私が所属する研究所(M-RCBG)も活動が本格化しました。私は本校唯一の東洋人シニア・フェロー及びM-RCBGアジア・プログラムのシニア・フェローとして、センター全体の活動とアジア全般に関連したプログラム活動を中心に参画しております。2ヵ月程前の9月14日午後、今期初の公式レセプションを開き、グラスを片手に懐かしい方々や新しい方々と互いに抱負を語り合いました。その時、在ボストン日本総領事館の鈴木庸一総領事をお招きし、新たな中国の友人をご紹介することができたことは私の大きな喜びであります。小誌でも時々触れておりますが、本学には中国の高級官僚や研究者も数多く滞在しております。その滞在方法も様々な形態があり、3、4週間といった極めて短い滞在から、2、3年といった形まで様々です。アジア出身のフェローを国籍別にみますと、中国が9、台湾が2、日本が4、韓国が1と、中国出身が圧倒的多数を占めています。中国出身者の人数も印象的ですが、質的にも驚異的に優秀な方々がいらしており、中国におけるトップレベルの「人材」は凄いものだ改めて感心しております。今年は清華大学や中国社会科学院(CASS)の優秀な研究者の方々に加えて、中国政府からは副大臣級の方が3人—農業部門の近代化を中国で担当されている中華全国供销合作总社(ACFSMC)の李春生理事长副主任、知的財産権にご関心の国务院法制办公室の汪永清副主任、中央・地方政府間関係にご関心をお持ちの贵州省经济贸易委员会

主任の張群山(张群山)副省长一がニューワールド・フェローとして参加されています。

小誌7月号でも触れましたが、日米中三極関係を扱った私の本が来年年初に慶應義塾出版会から出版される予定です。これに関して、アンソニー・セイチ教授をはじめとするケンブリッジの研究者にご協力頂くと同時に、汪副主任のように2005年1月8日に設立された呉儀(吴仪)副首相をリーダーとする国家知識財産権戦略指導委員会(国家知识产权战略领导小组)のメンバーとしてこの問題に取り組む方から直接お話が伺えると考えただけでワクワクしております。汪氏とは本学ロー・スクール(HLS)のウィリアム・アルフォード教授が東アジア法学研究プログラムのディレクターをなさっているので一緒に会合等に参加しようと言っております。また私は多くの方々と同じく陽明学を学んでいます。張副省长をご紹介頂いた時、私は「えっ、王陽明の縁の深い貴州省から?」と思わず微笑みつつお話ししたら大変喜んで下さいました。李副主任と部屋も近い私は毎朝挨拶を交わし、お忙しい中恐縮しつつも、農業分野の近代化投資における御苦勞を直接伺っております。若い有能な皆様、良かれ悪しかれ、また好むと好まざるとにかかわらず、日中両国は物理的に離れられないぐらい近い距離にある国同士であり、これは変更不可能です。我が国が平和と繁栄を将来にわたって享受できるかどうかは、日本が如何なる形で中国と付き合うかにかかっています。この意味で私は本学で隣国中国の優れた方々と直接話しながらかつて将来の東アジアを考えてゆきたいと思っております。

3. 日中関係: 21世紀東亜最大の課題

こうして今回のテーマは「日中関係: 21世紀東亜最大の課題」です。小誌で繰り返し申し上げますが、21世紀初頭における東アジア最大の課題は「中国の発展過程で噴出する問題に対し、日米両国が協力して如何に

中国に助言と苦言を案出するか」と私は考えます。すなわち人口13億人の中国が政治的・経済的・社会的に大きく変わろうとしている現在、日本は如何なる態度で中国と接するべきか、そして我が国にとって望ましい対中関係を構築するためには、(a)日本にとって最大・最強の国際的パートナーである覇権国米国とは如何なる協力体制が望ましいのか、(b)「最近隣国」の韓国とは如何なる関係を持てば良いのか、更には(c)インドをはじめアジア諸国、(d)中東や欧州、そしてロシアと如何なる形の政治経済的関係を持つべきかを考えなくてはなりません。こうして、対中関係を中心に私達は米国をはじめとする諸外国との関係を再確認する必要があると思います。

今月号の結論を先取りして申し上げますと以下の通りです。21世紀の東アジアにおける国際関係では、米国は中国と向かい合う時、日本という第三国を考慮せざるを得ず、同時に日本と向かい合う時には中国という第三国を無視することができない状況になっている。換言すれば日米中の三国は各々両睨みのスタンスを取らざるを得ない状況に置かれている。こうして21世紀の東アジアは、日米中三極鼎立という新たな『三国志』が展開されているといって過言ではない。同時に、中国最大の貿易パートナーが欧州連合(EU)となり、世界最大の武器輸入国である中国がロシアやEUと軍事技術の上で協力関係を探りはじめている現在、我々はグローバルな視点に立って日中関係を再確認する必要に迫られている。隣国同士である以上、歴史的・地政学的に様々な摩擦は避け得ない状況であるとはいえ、双方とも単純な論理、感情的で狭量なナショナリズム、加えて不正確・不完全な知識と情報に基づいて、「内向き」に「反中」と「反日」を繰り返している嫌いがないでもない。しかしながら、我々は将来生まれてくる若い世代の日中両国民、そして現在及び将来の世界に対して責務を負っている。こうして、「日本の国益」を冷静に熟考しつつ、中国との関係を再考する必要がある。以上であります。

米中関係@Harvard

小誌前号でも紹介しましたが、8月から9月にかけて *The Cambridge Gazette* で何度もご紹介している中国高級官僚研修プログラム(中国公共管理高級培训班)が実施されました。私は唯一の日本人としてそれに参加しましたが、レセプションの際、ディヴィッド・エルウッド校長から、「今何をしているの?」との問いに、「日米中三国間関係の本を書いております」と申し上げました。「ほう、それは凄い」との校長の発言に、当時原稿を未だ完成していなかった私は「しまった!! 校長先生に申し上げた以上はもう引き返せない」と後悔した次第です。同プログラムのリーダー格であるセイチ教授は、歓迎晩餐会のスピーチの中でリチャード・クーパー経済学部教授や燕京研究所長で東洋思想の泰斗、杜維明教授等の本学を代表する教授をご紹介された後、私の名前に触れて日本からも一人その場に参加していることを紹介して下さいました。私は再び「しまった!! 校長先生やクーパー先生に私が中国と親密な日本人だとの印象を与えてしまった。非力で怠慢な私自身の実力が露見してしまうが、こうなったら日中友好のためには全力を尽くすしかない」と複雑な心境に陥りました。晩餐会では隣の方の息子さんが日本に留学中ということで話が盛り上がり、乾杯の時に「イッキ!」と仰ったのには思わず恥かしくなってしまいました。こうしたなか日本留学の経験をお持ちで日本語が流暢な共産党幹部の方々が近寄って来て下さり、素晴らしい機会を得た幸運に喜んでおりました。

さて皆様、憎しみが憎しみを生んでいる中東情勢をみてお分かりの通り、戦争とは本当に悲惨なものです。太平洋戦争での敗戦直後、生き残った帝国海軍の将官達が集まり太平洋戦争突入時を議論した記録『海軍戦争検討会議事録』という本があります。その中に開戦2ヵ月前、山本五十六連合艦隊司令長官が語った言葉を記憶した方の発言が出てきます―「一大将としていわせるなら、日本は戦って

はならぬ。結局は国力戦になってまける。(日中戦争で)日本は…疲れてる。また戦争すれば、朝鮮・満州の民族も離反する」、と。山本長官の予想通り、日本は米国との国力差から当然の如く敗れ、そして周囲の国々からの恨みを招き入れました。敵味方関係無く、一般市民を巻き込む近代戦は正しく悲惨です。昨年夏にエルウッド校長、同僚のジュリアン・チャン氏と共に3人で東京を訪れて、日本銀行の堀井昭成理事及び塩崎恭久官房長官と会食をした際にもサイパン島玉砕時のバンザイ・クリフから飛び降りる御婦人の姿をとらえた記録映画等の話が出て、5人とも思わず一瞬沈黙した次第です。私には完全な形で把握する能力はありませんが、沖縄戦の記録映像の中にあって、震えながら茫然とする子供の姿を観るだけで悲しみと苦しみが存在したことだけは理解できます。この意味で本土決戦を前に終戦を迎えさせた昭和天皇のご決断と、冷静な判断ができなくなった中堅将校の軽挙妄動を阻止した阿南惟幾陸軍大臣のご努力を思い浮かべる時、身が引き締まる気がします。

小誌で何度も触れたアジアのリーダーが集い中長期の展望に関してオフレコで自由闊達に議論する会合(Asia Vision 21 (AV21))でも素晴らしい中国の方々とお目にかかる機会を持ちました。ただ、皆様容易にご想像して頂けるでしょうが、日中関係は当然ながら良好な部分だけではありません。難しい歴史の問題、特に靖国神社については、シンガポールやオーストラリア、そしてハーバード大学の研究者までもが私に対して、すべてが正確ではないにしろ厳しい発言をなさいました。その時、中国の年配の方が次のように仰いました。「私は日本の方々が日本の過去をどうお感じになろうと構いません。またどう行動されるのかは日本の方々の意思と責任ですから私が意見を述べる資格はないでしょう。ただ一つだけ申し上げたいことがあります。戦後、私の母はいつも私を含む子供達に言い聞かせていました。お前達は運が良かった。成長して聞き分けが良い子供達だったから。一番下

の子は赤ちゃんだったので日本兵が私達が隠れていた場所に近づいて来た時、私は泣き止まぬその子の口を塞ぎ、この手で我が子の命を絶ったんだよと泣きながら話していたのです。私はその時の母の辛そうな顔が忘れられないのです」と静かに仰いました。

このように米国東海岸で日米関係を考えれば考える程、中国を考えざるを得なくなってきたと私は感じております。また中国も同様に中米関係を考えれば考える程、日米同盟を考えざるを得なくなっています。そして、ここにおいても日中間の知的対話は大変難しいものがあります。その主な原因を挙げますれば、①双方が歴史を含めて、不完全な情報に基づき先入観を抱いていること、②公の場で冷静に議論するという歴史が浅い日中両国の人々は、公の場では感情的な議論が支配的になるか、或いは互いに強硬派による意地の張り合いに陥り、互いの立場を理解して、その違いを埋める建設的な努力をする領域にまで達しないこと、③国際関係の知識が浅ければどうしても日中という二国間関係で議論するという姿勢になり、グローバルな文脈や環境の中での日中関係という捉え方ができないこと、以上3点を私は痛切に感じております。こう考えますと、私達は、①歴史も含め、母国語だけの情報だけでなく、英語文献、可能ならば中国文献も含めた形で、情報を徹底的に整理・選別し理解する必要があること、②感情的な対決姿勢の議論は避け、話し合いの目的を限定化し、また明確化すること、③米国を含む第三国の人々から観ても納得してもらえるような世界的に通用する価値観で理論武装し、また第三国の人々にもグローバル化した国際社会の中での日中関係の意義を正確に認識してもらうこと、以上3点が今後の我々の努力の方向性だと思っています。

中国にご関心のある方なら、中国改革フォーラムの鄭必堅理事長の言葉「中国の平和的台頭(中国和平崛起/China's Peaceful Rise)」をご存知と思います。2003年11月3日、博鰲(ボ

アオ)アジア・フォーラムで同理事長の「中国の平和的台頭の新しい道とアジアの未来(中国和平崛起新道路和亚洲的未来)」と題した講演がこの言葉が世界に広まる最初の機会とされています。その直後、12月7～10日の訪米の際、温家宝首相もこの言葉「中国の平和的台頭」を本学で触れられています。10日、本学を訪れた温首相は、「中国に目を向けて/«把目光投向中国»/Turning Your Eyes to China)」と題して本学に集まった知識人及び将来のリーダー達の前で語りかけました。セイチ教授からこの講演の予定を伺った時、生憎私は一時帰国の予定を既に入れてしまった後でしたので、その講演会の様子は資料と友人の話で知りました。それによれば、本学ビジネス・スクール(HBS)のバーデン・ホールで、所持品の制限、時間厳守等の厳重な警戒の中、本学のローレンス・サマーズ総長、キム・クラーク HBS 校長をはじめ、ドワイト・パーキンス教授等多数の研究者が参加し、中国側からも李肇星外交部長、馬凱国家発展・改革委員会委員長、魏礼群國務院研究室室長、楊潔篪駐米中国大使等、またクラーク・グラント駐中米国大使に加えて多くの報道陣等、総勢約800人程の会合だったそうです。同首相は、①老子、莊子、孔子、孟子、孫文という中国の発展に貢献した人物に言及しつつ、②ハーバード大学に縁の深いエマーソン及びフェアバンクが抱いた中国に対する関心に触れ、更には③作家のディケンズやドライサーが描く英米初期資本主義時代における労働者の苦境に触れつつ、現代中国の抱える難題と将来の方向性を説明されました。そして、将来の指導層を形成するであろう中国人エリートと米欧の知識人の前で、同首相は日中戦争時の思い出—同首相の家と祖父が築き上げた学校が日本軍によって焼かれたという辛い事実—を語られました。その場にいた日本の友人はその時の複雑な心境を隠せなかったと語ってくれました。こうしてハーバード大学で、中国の今の指導者が将来の中国指導層の一角を成す研究者・留学生、そして世界の知識人の前で、彼等の歴史認識を伝えたという事実とそ

の日本の「国際イメージ」への影響について考えさせられた次第です。

冒頭で申し上げましたように、私達フェローはいずれの専門分野であるにしろ、様々な経験を積んだ人々の集まりなので、日中間での知的会話も相対的には冷静にできるような気がします。しかも会食や研究会を重ねて時間をかけてゆっくりと築き上げている、直接的・継続的で双方向の知的対話ですから彼等の「本音」をうかがい知ることができます。或る中国人フェローに向って私が鄭理事長の「中国和平崛起」を最初に聞いた時、私が第一に思い浮かべたことは幕末の志士、吉田松陰が残した言葉「草莽崛起(ソウモウクッキ)」であったことを伝えました。皆様ご存知のことと思いますが「草莽崛起」は、日本が近代化に向けて旧来の身分制度を破壊し、新しい形の人材活用制度を作り出そうという時代を象徴するような言葉です。随分昔に学んだ「崛起」という言葉が中国語で再び巡り会えたことは感慨深いと中国出身のフェローの方に申し上げました。これに答えて、その方は日本の明治維新を称賛し、「ジュン、中国は政府に対して建設的に批判するという『ヒト』を必要としています。日本の福澤諭吉のような『ヒト』が必要なのです。でも…」とそこで言葉を濁されました。私は近代日本を築いた福澤諭吉や西周等、先人達の努力に感謝する一方で、近代化に苦悶する現代中国のエリートの心境を垣間見たような気になりました。

米中対話の際、米国の方々は、「民主主義」や「市場原理」を人類共通の普遍的原理として中国の方々に対して厳しい姿勢で臨まれることがあります。しかし西洋史や米国民主義の歴史を顧みましても、諭吉が翻訳したとされるトクヴィルの『アメリカの民主主義(*De la démocratie en Amérique*)』、それにジョン・スチュワート・ミルの『自由論(*On Liberty*)』が指摘した「多数者の専制(*le despotisme de la majorité/the tyranny of the majority*)」という危険性を民主主義は内包しております。従って、

小誌前号で触れましたように市民が自らを政治教育して「良識」を持たない限り、理想を追い求めたヴァイマル・ドイツや革命直後のフランスに代表されるように、「大衆(*the masses*)」は「愚衆(*ochlocrats*)」となり、ヒトラーやロベスピエールのような煽動家に簡単に操作されてしまいます。また 1978 年の「改革・開放」前まで中国経済を疲弊させたのも彼の「文化大革命」ですが、これも紅衛兵等による一種の「多数者の専制」であり、良心的な中国知識人が弾圧されたことは皆様ご承知の通りです。ミルは『自由論』の中で、西洋から観れば羨むばかりの才能溢れる人々を擁する中国が何故発展できないのかを説明します。そしてその理由をミルは「習慣の専制(*the despotism of custom*)」としています。現代中国が「習慣の専制」から脱却し、13 億の人民を政治教育させて彼等に「良識」を持たせ、「多数者の専制」の危険を回避して、自由主義に基づく中国を築き上げることが可能かどうか。私には長い歳月を要する課題に見えてなりません。因みに我等が諭吉は『文明論之概略』の中で、「西洋諸国に行わるる衆論は、その国人各個の才智よりも更に高尚にして、その人は人物に不似合いなる説を唱え不似合いなる事を行う者と言うべし。右の如く西洋の人は、智慧に不似合なる銘説を唱(となえ)て、不似合なる巧を行う者なり。東洋の人は、智慧に不似合なる愚説を吐(はき)て、不似合なる拙を尽くす者なり」、すなわち「西洋人は各自の才能以上の高尚なる話をし、東洋人は各自が持つ智慧以下の話をする」と言っています。続けて諭吉は東西の差を「衆議の習慣」、すなわち同じ習慣であっても、「『良い』習慣」である質の高い知的対話を「第二の天性」にしているかどうか、と明解に論じています。

グローバル時代の日中関係

2 ヶ月程前の 9 月 11 日、ボストン大学に在る人間科学研究所(IHS)が主催する会合「新たなグローバル・コンテキストの中での米露関係(U.S.-Russian Relations in the New Global

Context)」に参加しました。会合ではカーネギー平和財団(CEIP)のアンドリュー・カチンス氏と CEIP モスクワ事務所のリーア・シェヴツォヴァ女史が米露関係を話されました。カチンス氏はブーチン大統領に招かれた時の思い出話を語りました—30 人程の外国人招待者は 2 人のアジア人(日中それぞれ一人)を除きすべてが欧米諸国出身であったが、同大統領が最も大切に扱った客が中国からの方だったそうです。私は現在、中国の欧州及びロシア経由での経済・技術交流が如何なる形で発展するかに興味を持っています。カチンス氏が現在露中関係に関する本を書いていると聞き、会合の翌日、同氏から電話で様々なことを教えて頂きました。このように世界政治経済を鳥瞰する際、米国だけでなく、朝鮮半島を含む東南アジア、更には欧州、ロシア、そして中東、アフリカ、ラテン・アメリカといずれの国・地域との関係をとっていても中国の行動をはずして考えることができなくなりました。経済活動だけでなく研究でも同様で、私の周囲の研究者もセイチ教授や本学に集まる中国の高級官僚や研究者の意見を聞かずして自らの分野の研究ができなくなりつつあります。また欧州の研究者は私に日本ではなく、今年日本を抜いて世界第 2 の自動車販売台数と予想される中国の話ばかり聞いてきます。

脱線で恐縮ですが、私の周囲にアジア地域研究の専門家で鳥インフルエンザの緊急医療体制に関心を持っている人がいます。その方から 2 ヶ月前に大変面白いジョークを教えてくださいました。もうご存知の方には申し訳ありませんが暫くご辛抱して頂きお付き合い願います。国際連合(UN)が世界各地でヒアリング調査をしました。質問は極めて簡単でただ一問、すなわち「あなたの国以外の世界における食糧不足のための解決方法に関して正直なご意見をお聞かせ願います(Would you please give your honest opinion on a solution for the food shortage in the rest of the world?)」でした。しかしこの調査は失敗に終わったそうです。その理由は次の通りです。すなわちアフリカで

は(深刻な食糧不足の故に)「食糧(food)」が何を意味するかが分かる人が少なかった。東欧諸国では(不正だらけであるが故に)「正直な(honest)」の意味が分かってもえなかった。西欧諸国では(豊かであるが故に)「不足(shortage)」の意味が理解されなかった。中国では「意見(opinion)」という意味が理解されなかった。中東では「解決方法(solution)」という意味が分からなかった。南米諸国では「お願いします(please)」が認識されなかった。そして米国では「あなたの国以外の世界(the rest of the world)」を誰も理解できなかった、というものです。このジョークを聞いた時、思わず吹き出しましたが、隣の知人が「ジュン、日本が抜けているけど、どんなのが適当かな?」と聞きました。私は「ああ、また『ジャパン・パッシング(“Japan passing”)』がここにも現れているなあ」とチョッと悲しくなっていましたところ(以前は必ず「日本人は…」というフレーズがありました)、もう一人の友人が意地悪そうに「日本では英語で回答を求められたので誰も答えなかった」と言いました。私は「くやしい」と思いましたが、痛いところだが或る意味で厳しい現実を表していると思いました。この意味でも有能で若い皆様のグローバルなご活躍を願ってやみません。

10 月 19 日、一時帰国の際、関西経済同友会の創立 60 周年記念のレセプションにお招き頂き、ボストン、上海、そして大阪でお目にかかる素晴らしい財界の方と再会する機会に恵まれました。関西経済同友会の方々は年に一度ボストンで国際政治経済をテーマに、また 2 年前からは上海の復旦大学の研究者を交えて東アジアをテーマに活発な討論会を主催されております。同日、長らく中国に滞在して鄧小平副首相を巡る歴史を書かれているエズラ・ヴォーゲル教授が、講師として大阪にお越しになり、私も久しぶりにお目にかかることができました。同教授は日中で歴史を冷静に、しかも過去の事実を現在の価値判断を出来るだけ排除した形で記述することの重要性を力説されておられます。これは非常に

大切なことです。私自身、歴史の正確性に関しては様々な困難に遭っております。すなわち、①限界がある認識力・記憶力を持つ体験者の実録を単純に信じる訳にもゆきません。また②公式・非公式の記録に関しても単純に鵜呑みにするのは危険です。③事後的記録に関しては同時性を失っているが故に都合の良い記述になっている危険性があります。加えて④読者側にも歴史小説や映画等の影響を受けた結果として先入観を持っているという危険や、知識が浅いと理解できる範囲内でしか歴史を判断しないという問題があります。この意味でヴォーゲル教授のご努力に期待すると共に、私自身も努力を続けたいと思い、今は「天羽声明」で有名な外交官、天羽英二事務次官の日記を本学図書館で読んでおります。

私自身、本を少し読んだだけで或る国・地域、そして歴史を理解した「つもり」になる危険性と醜悪さを痛感しております。私も子を持つ親として、グローバル時代において直接的な形で世界の国・地域を観察・体験することの重要性を教えようと、様々な所に家族を連れて行きました。現在は自分自身で旅行できる年齢に達したので、これからは単独旅行か友人と行きなさいと勧めています。私は1990年代後半から2002年まで、専修大学の大橋英夫教授と香港理工大学のトーマス・チャン(陳文鴻)教授に連れられて、CASSや人民大学等を頻繁に訪れましたが、その経験を基に、1999年夏、家族を連れて北京を訪れました。私を除く家族3人が北京空港に着いた時の「固まった」表情を思い浮かべると、私は今でも吹き出してしまいます。当時、新空港ビルの完成前で窓のサッシは木製でした。ロサンジェルスやソウルの空港と比べてあまりにも違うためか、彼等は声も出ません。しかもホテルまで軽自動車で移動したため3人は完全に「固まって」しまいました。しかし北京ではCASSの王洛林副理事長ご夫妻が私用の家族旅行であるにもかかわらずお食事招いて下さり、また日本大使館で当時一等書記官をされていた安井章氏に万里の長城までの

ドライブに連れて頂き思い出深い旅行となりました。ご存知の通り、長城からの眺めは本当に素晴らしいものがあります。トロイの遺跡発掘で有名なハインリッヒ・シュリーマンも、長城を眺めた時の感動を、「私は…素晴らしい眺望をたくさん見てきた。眼前に展開された光景の壮麗さに匹敵するものは何もなかった。私は呆然自失し、言葉もなくただ感嘆と熱狂に身をゆだねた。かくも多くの驚異を見ることに慣れることはできなかった(J'ai vu des panoramas magnifiques... mais jamais je n'ai rien vu qu'on puisse comparer au splendide tableau qui se déroule ici devant mes yeux. Stupéfait et ébahi, plein d'admiration et d'enthousiasme, je ne pouvais m'accoutumer à voir tant de merveilles.)」と語っています。

宿泊先であるヒルトンの周囲は当時未だ農家が在って、窓から子連れのアヒルが見え、子供達が喜んでいました。そして夜寝ようとした時、家内が周囲が真っ暗であることに驚き、「昼間、あの辺りは農家だったところでしょ?」と不安そうに私に聞きました(今は変わっていますが)。また観光名所を案内して下さったのは当時人民大学の優秀な大学院生で、現在中国商務部の高級官僚である王雪佳女史でした。頤和園(イワエン)を訪れた時、彼女は歩き疲れた当時中学生と小学生の私の子供達を眺め、「クリさんのお子さんは鍛え方が足りない」と私を厳しく批判しました。そして人民広場に在るマクドナルドで家族3人が無邪気に楽しんでいるのを見て、王女史は私に向かい、「クリさん、クリさんのご家族をこうして実際に見るまでは日本人は恐ろしい人間だと思っていました。今クリさんの家族を見て、素晴らしい方々がいることを知りました」と言いました。私は家族を連れて来て良かったと改めて思った次第です。ただ傑作だったのは、ホテルに戻って来た時の息子の言葉でした—「ヒルトンに戻ってくるとホッとするね、パパ」と。しかし、かくいう私も大橋教授と一緒に最初の北京出張をした時は息子同様、いやそれ以上に「パニック状態」に

陥り、スピルバーグ監督の映画『太陽の帝国 (Empire of the Sun)』の冒頭部分を思い出していました。大橋先生は「クリちゃんは中国ではベンツに乗せてサファリ・パークを巡るような形で移動させないと駄目だなあ」と仰ったのを今でも覚えております。また私にとって初の中国単独出張となった2005年2月の長春出張直前、それ以前の訪中時に多くの方々のご厚意で過保護に育てられたひ弱な私は不安と恐怖に襲われていました。そしてケンブリッジ出発前夜、万が一を考えて友人と「別れの杯」を交わしておりました。長春から北京に戻った夜、日本大使館の専門調査員であった荒井崇ご夫妻と食事をしましたが、その時のお二人の好奇心に満ちたお顔も忘れられません。笑いを押し殺しながら、「栗原さん、どうでした?」と。しかし長春では荒井氏からの連絡で市政府の尹冬姣女史が案内役を下さり、有意義な出張になりました。ただシャングリラ・ホテルで見かけたフォルクス・ヴァーゲン社関連のドイツ人の言動を様々な意味でまた複雑な心境で私は観察しておりました。皆様、広大な中国はこうして様々な姿を私達に見せ、またそれ故に様々な国々の「ヒト」、「モノ」、「カネ」、そして「情報」が中国を巡って動いております。皆様が間接的情報だけに頼らず、直接的に体験・対話して、正確な中国情報を得られることを願っています。

日本の国益を考える

若くて才能溢れる皆様、来年は日中国交正常化 35 周年を迎えます。戦争と冷戦を経て、日中関係が正常化してからやっと 35 年が経ちました。これまでの両国の先人達の成果を皆様と共に発展的に拡大する時が到来したと私は考えております。地政学上近接しているために当然のこととして難しい問題を多く抱えているのは皆様ご承知の通りです。しかし、中国は日本最大の貿易相手国であり、中国側にしても同国第 3 位の貿易相手国が日本です。こうしたことを勘案しますと、①平和と安全、②自由貿易体制下での経済的繁栄、③自由主

義と民主主義等の堅持、④日本の学術文化的発展と人材育成、という我が国の国益を追求する時、対中関係の深化が不可欠であることは誰も否定しないでしょう。しかも、現在の米中関係の緊張化と共に、地政学上遠い地域の EU が中国にとって貿易、技術交流等の面で先行し、グローバルな形で日中関係を冷静に考える時代になりました。この意味で狭隘なナショナリズムに侵されることなく国際関係を冷徹にしかも正確に捉えて行動する若い皆様の健全な愛国精神に基づくご活躍こそが、日本にとって最も必要とされているのです。

小誌 7 月号で、日米関係における「ヒトの和と輪」をご紹介しました。と同時に日米間の「和と輪」が最も強いが、他の国々との「和と輪」も大切であると申しました。政治経済の高いレベルでは、1984 年に中曽根康弘総理と胡耀邦総書記の合意で、日中 21 世紀委員会が発足し、2003 年からは小林陽太郎富士ゼロックス会長と鄭必堅理事長がリードされている新日中友好 21 世紀委員会が活動を行っています。また「中国覇権」と自認される東亜キャピタルの津上俊哉社長のご活躍を私はウェブ上で楽しく拝見しております。私自身も日中間の「ヒトの和と輪」を本学だけに限定せず、マンスフィールド・センターの顧問としてマンスフィールド財団と共同で、日米中三国間の中堅リーダーによる知的対話にも参画してゆくつもりです。皆様、私は中国がいつまでも、そして中国国民 13 億人の最後の一人までもが「反日」になることに反対です。逆に、中国に「親日」の「ヒト」をできるだけ多く増やしたいと考えております。そうした努力こそが平和と繁栄という現在及び将来の日本の国益に寄与し、また日本の世界に対する責務の一つでもあると思っております。

勿論これは私の考えであり、皆が賛成して下さるとは思っていません。或る「反中」の日本の方と或る「嫌日」の中国の方に、以前、次のように言いました—じゃ日中間で、もう一度戦争を始めるのですか? よろしい。では

あなた方だけで始めて下さい。でも、何年戦争をされる予定ですか? 10年? 20年? 何年か知りませんが永遠という訳にはいかないでしょう。停戦の時には私の出番です。それまでは私は日中両国の繁栄と共存のための方策を考え、また中国語を真剣に学んでおきます—と申し上げました。また日本の方に向かい、「前回とは異なり、目的・方法・時期と期間を明確にして頂き、戦略的に戦って下さい。ただし、泥沼のヴェトナム戦争に苦しんだ米国を皮肉ったバーナード・モントゴメリー元帥の有名な言葉を忘れないで下さい—米国は戦争の第二のルールに違反した、すなわちアジア大陸に陸軍で進軍するな、を。第一のルールはモスクワに行くな、である。この二つは私が作ったものだ(The U.S. has broken the second rule of war. That is, don't go fighting with your land army on the mainland of Asia. Rule One is don't march on Moscow. I developed these two rules myself.)」とも申し上げました。

4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」第6号の本文は以上です。私にとっての初の訪中は1979年夏です。学生代表団の一員として、感激しつつ敬愛する周恩来総理のお国の土を踏みました。外国人の訪中が極端に制限されていた当時は、宿泊先は北京の友誼賓館を除くとすべて共産党幹部の宿舎だった記憶があります。日本人を含む外国人が少数でしたからどこでも「熱烈歓迎」を受け、また珍しがられました。煙草を吸わない私ですが熱心に勧められたので友好のためと思い吸った記憶があります。また友人が「街なか探索」をしたためにスパイと勘違いされて公安局の監獄に入れられ、団長が大慌てで共産党幹部と交渉していた珍事も目撃しました。30年近く前のことなのでもう「時効」として許して頂けると思いますが、私も大失敗をしました。炎天下の中、或るトラクター製造工場を訪れたのですが、広い敷地にポツン、ポツンとトラクターが散在しておりました。通訳の方から「栗原さん、日本

にもこんな工場がありますか?」と聞かれた時、暑さと喉の渇きからか、考えと心配りが足りず「40年ぐらい前なら有ったかも知れませんが」とポロッと言ってしまいました。ご想像の通り、その通訳の方は二度と私とは口を利いて下さいませんでした。また街中を歩いていると一人のお婆さんが私達が如何なる集団なのかを周囲の人に聞いた途端、顔を引きつけて猛然と私達に向ってこられました。案内役の共産党の方々が間に入ってお婆さんは取り押さえられましたが、この「戦争の傷跡」が噴出した光景—それは私達の訪中で唯一経験したものでしたが—は私の臉に焼きついております。そして今、敗戦後、10ヵ月で無事完了した中国からの復員・帰国と、戦後も長く「傷跡」を更に深めたソ連からの復員を比較しつつ、日本の節度ある対中政策を求めた朝河貫一博士や石橋湛山首相等の主張を読み直しております。さて、本学には戦前のJPモルガン日本支店長で、米国財界の有力者だったトーマス・ラモント氏の名にちなんだ図書館があり、私も音楽や映画のCDやDVDを頻繁に借りています。彼は1920年に「極東では太平洋を挟む(日米)両大国が協調と理解している限り、平和が保障される…その第一の証拠が中国である(In the Far East, peace can be permanently secured only if the two great Powers lying on either side of the Pacific work together in harmony and understanding. . . . The first evidence of this should be our common attitude towards the Chinese nation.)」と語っています。私も本学で米国、そして中国の友人と共に知的対話を通じて、東亜の平和と繁栄を今後とも考えてゆきたいと思います。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address: 79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138	
Office address: 124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138	
Tel: +1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948	
Email: Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com	